

エコツーリズムによる

自然資源の保全と活用

株式会社地域環境計画 千々岩 哲

一 はじめに

今年一月に開催された生物多様性ワンプラネット・サミットにおいて、日本は生物多様性の保全のため二〇三〇年までに保護区を三〇%設定することを約束した。生物多様性の保全には、生きものの生息地である自然環境の保全が欠かせない。日本はCOP10でSATOYAMAイニシアティブを世界に提唱し、人が関与した二次的自然が生物多様性を守る役割を担っていることを印象付けた。

一次産業が生み出した地域の社会経済と景観、文化は自然環境と深く関係してきた人の暮らしの歴史を示すものでもある。人口減少を迎え、その影響が各地に表れている日本において、観光立国とし

民間主導による自然環境保全の推進につなげたいと思う。

二 日本におけるエコツーリズムの現状と課題

わが国は、インバウンド旅行者の受け入れ目標数を掲げ、その達成のために情報発信に努め、あわせて世界に通用する国立公園等の整備、コンテンツづくりの支援などを進めてきた。旅行者数は順調に推移してきたが、新型コロナウイルスの広がりに伴い、事態は大きく変わった。それでも来る日のために準備を進める動きは各地で続いている。

これまで日本は、食や文化を強みとしてきた。しかし、エシカル消費やSDGs、サステイナブルツーリズム等の広がりに伴い、海外では食を含めて野生動物の取り扱いや接し方、観察に関する倫理に変化が見られ、この点において日本は遅れをとっているように思える。昨年度、作成に関わった環境省業務（「生きものとの出会いの旅を創る―国内・海外二〇の事例―」（図1） https://www.env.go.jp/nature/wildlifetourism/20210315_20casesofwildlifetourism.pdf）では、日本と海外の先

行事例をまとめる中で、欧米では複数の旅行業界団体や企業が、野生動物に関するツアーにおける観察法や接し方についてガイドラインを設け、変化に対応するだけでなく、けん引していることを認識した（例えば、カナダのCBVA: <http://www.bearviewing.ca/>）。コロナ禍はこの変化を日本人に気付かせることを妨げている。国内では、食材となる生きものの適切な取り扱いや倫理的配慮よりも美味しさや話題性に注力している。アトラクティブな体験については、自然環境や野生生物への配慮を欠き、飼養や過度な利用を抑えてきた伝統的なシステムが活かされていないケースがみられる。欧米のインバウンド旅行者は、対象とする野生生物の生息地に身をおくと、偶然の出会いを大事にしていると聞く。今後、このようなあり



図1 国内外のエコツアー先行事例を紹介した冊子

方がインバウンド旅行者に好意的に受け止められるかは危うい。SATOYAMAイニシアティブに恥じない地域ルールの設定が必要ではないか。

三. 発展ビジョンと地域ルール

エコツアーのコンテンツを考える際には、旅行者（インフルエンサー）、地域住民と協力者、事業者（プロモーター）の三者の視点で考えることが重要である。先に述べたことは、インバウンド旅行者と事業者との思考のギャップを示すものである。これを埋めるためにもコンテンツづくりに外部の人材を加えることが望ましい。エコツアーリズムの展開として、最重要と考えることは、地域や事業団体の将来像、発展ビジョンを描くことである。

これは、地域において協力関係を築き、強固にする上でも役に立つ。各自の経済発展だけが進むと企業の乱立が起き、自然環境の保全が困難になる。このような事態を避けるために

も地域のルールやガイドラインが必要であり、未来像はその核となる。持続可能なツアーコンテンツであるためには、自然環境や対象資源の保全が不可欠である。SDGsの時代であるからこそ、保全保護のための地域ルールやガイドラインを設け、その想いを物語として伝えるべきである。守られた特別な地であることは、ツアーの付加価値を高めることにつながる。エコツアーのコンテンツ作成の大きな流れを図2に示した。将来像を描いた後に、地域資源の拾い出しと関連性を整理し、物語とし

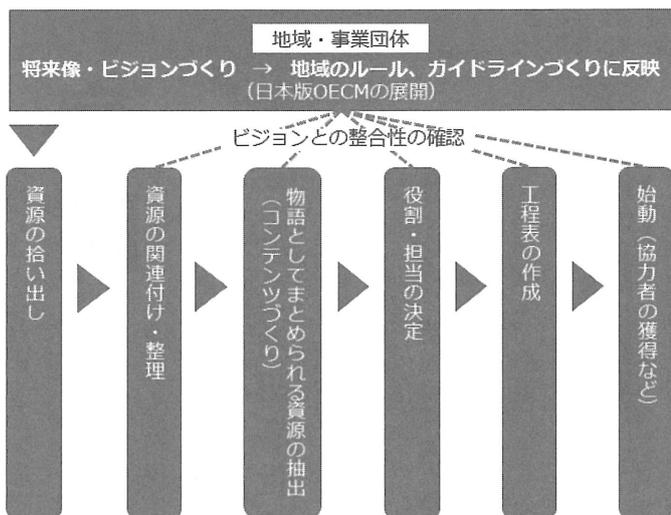


図2 エコツアーのコンテンツ作成の手順



図3 エコツアーコンテンツ作成のための手引書

てまとめられるものの抽出（絞り込み）を行い、語り部や情報提供者などの協力者の洗い出しや協力の打診などを進めることになる。その後、事業を進める上での役割分担と工程表の作成を行い、確実に進める体制づくりが必要になる。また、これらの流れは、地域（事業組織）の将来像と整合性を取ることが重要である。

自然資源に配慮したコンテンツ作成と留意点の詳細については、以前、作成に関わった「ツアー企画者のための地域の魅力を活かすエコツアー設計の手引き」<https://www.kouiki-kansai.jp/material/files/group/10/ecotour-tebiki.pdf>（関西広域連合・図3）に詳しい。「物語」を重視したコンテンツづくりは、詰め込み型コンテンツを回避する上でも有効であり、旅行者が求める訪問地なら

ではの特別な体験の提供につながる。

四. おわりに

SATOYAMAイニシアティブが示すのは、人の暮らしがあって自然が守られる自然共生社会の姿である。過去には過度な利用により山林が荒廃することもあった。森林の回復が進み、法整備が進んだ今日において、受け継いだ自然環境、自然資源を守り活かす新しい方法を見出すことは、国際的に進められるOECM (other effective area-based conservation measures) の動きにも合致する。エコツアーリズムの広がり心配する声も聞かれるが、日本モデルと言える民間主導の自然環境保全の仕組みづくりをエコツアーリズムの展開に期待したい。

千々岩 哲●ちぢい わ あきら
株式会社地域環境計画 野生生物管理部 名古屋オフィス勤務。技術士（環境部門、建設部門）。ニホンザルやタヌキを対象に生息地利用等を研究。現在は、野生動物の保護管理、ツアーリズムや獣害対策などを含めた地域活性化の支援業務を主として、環境アセスメント、企業CSR支援などに携わる。